



< H24062012 >

注意事項

- 1 問題冊子および記述解答用紙は、試験開始の指示があるまで開かないこと。
  - 2 問題は2～11ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。
  - 3 解答はすべて解答用紙の所定欄にHBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルで記入すること。
  - 4 受験番号および氏名は、試験が開始してから、記述解答用紙の所定欄（2か所）には受験番号と氏名を、マーク解答用紙の所定欄には氏名のみを記入すること。
- 受験番号は正確に正しいに記入すること。読みづらい数字は採点処理に支障をきたすことがあるので、注意すること。

数字見本	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
------	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

- 5 マーク欄は、はつきり記入すること。また、訂正する場合は、消しゴムででないに、消し残しがないようによく消すこと（砂消しゴムは使用しないこと）。

マークする時	● 良い	○ 悪い	○ 悪い
マークを消す時	○ 良い	○ 悪い	○ 悪い

- 6 いかなる場合でも、解答用紙は必ず提出すること。
- 7 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

次の文章を読んで、あとの問に答えよ。

かくて月日はかなく過ぎて、春にもなりぬ。世の中ものどかなる様なれば、和歌所の人々<sup>(注1)</sup>、少々参り合はれたりしかば、「今は世の花も、盛り過ぎぬらむ」と、「大内<sup>(注2)</sup>の花、散らぬさまに」と、やがて引き連れて、車二両に込み乗りてまかれり。もとより群れあたる大徳、或は由ばめる女房も、多くさまよひありく。この人々と見て、いかでか心遣ひもせざらむ。うなづきさまめきて、歌どもこなたかなたより持て集ふ。御階の程に円居して、連歌などし侍りて、やがておのおの歌を詠む。花一枝折りて、歌を置く。

中将定家の詠まれたりし、

<sup>2</sup> 年を経てみゆきに慣れし花の蔭ふりゆく身をもあはれとや思ふ

はらからに法橋景榮、いざなひ具せられて侍りし、

梢にはなほ大内の山桜風もあだには思はざりけり

「これらは良し」など、その座の人々申し合へりしかば、取り分きて記し侍るなり。

さて帰りなむとするに、女房のさしよりにて、「花一枝折りて給へ。知らぬ人をば御所守の諫め侍り」と申すは、中原宗安申しかけし、

折れと言はばいともしし桜花飽かぬ匂ひを袖に任せよ

返しも侍りしを、忘れにし口惜しさよ。弥生の十日余りの月はなやかに差し出でて、まかり帰る。「たつ事やすき」<sup>3</sup>と誰も誰も思へるに、かごとがましきまで、花はこぼれ落つ。月花門のほとりに、笙の笛を吹き鳴らしたりしかば、笛を取り出でて吹き合はす。少将雅経の篳篥吹き置く。唱歌して、建春門より出でて、待賢門よりおのがじし名残惜しみてまかり帰りにき。

かく花見に引き連れてまかりぬるよしを聞こしめして、夜更くる程に帰参りたりしかば、召し寄せて、「誰れ誰れか、心とまる歌詠りつる」など、問はせ給ふ。この中将の「みゆきに慣れし」と詠めりつる歌を語り申す。「誘はれざりけるこそ、口惜し」<sup>A</sup>とて、笑はせ給ふ。

「うらやまし。明日行きて、ご覧す」<sup>B</sup>と仰せあれば、さも参りぬべきはの人々に、夢見せに遣はす。

次の日の午の時ばかり、御幸あり。忍びて仰せありつれど、こなたかなたより、馬・車多く行き違ふは、追ひ追ひ人々の参るなるべし。げに、「輕軒九陌の塵に馳す」と思ひ出づ。待賢門より入らせ給ふ。心もとなげにおぼしめし至れば、置路も遙かなる心地して、沓の声々もいそがはし。御幸なるを見て、もとより女房ども逃げ騒ぎあへるを、「とどめよ」と仰せあれば、まかりて言ひ掛く。「花ならばしばし」<sup>C</sup>散りそ木の下を、口<sup>d</sup>に任せて指し事に申したりしかば、「言はではありと効や無からむ」と言ひて、山吹を持ちたりしを賜びたりし。

さて花下に人々近く召し寄せて、「むげに残り少なくなりけり」とて、御硯・紙など召し寄す。各々歌つかまつるべきよし仰せあれば、人々に紙ども分ち賜ふ。花一枝折りて、文台にして、各々歌を置く。其のたびの御製、

天つ風しばし吹き閉じよ花桜雪と散りまがふ雲の通ひ路

かへらせ給ひしに、散りたる花を御硯の蓋に掻き集めて、撰政殿<sup>(注3)</sup>へ参らせさせ給ひしに添へられたりし、

今日だにも庭を盛りとうつる花消えずはありとも雪とかも見よ

この花を持たせて、三条坊門に渡らせ給ひしかば、参る。「ただ今、御院参」とて、御前・御隨身、庭に並み立ちて侍りしを、分け参りてこのよしを仲資朝臣も啓し侍りしかば、出でさせ給ひて、御てづから取らせ給ふ。御返し、

誘はれぬ人の為とや残りけむ明日より先の花の白雪とぞ、聞き侍りし。

(注1) 和歌所の人々：後鳥羽院の命で、当時「新古今集」を編纂していた歌人たち。この文章の筆者である源家長も、その一人である。

(注2) 大内：平安宮の内裏。花の名所。(注3) 撰政殿：藤原良経。

問一ノ一 傍線部「この人々と見て、いかでか心遣ひもせざらむ」の解釈として最も適切なものを、次の中から一つ選び、答一ノ一の欄にマークせよ。

A：旧知の僧や女房たちが来てゐるのを見て、どうして何もせずにいられようか。

I：花見に僧や女房たちが来ているのがわかって、どうして知らぬふりをしようか。

ウ：僧や女房たちと一緒に花を見て、どうして互いに気をつかわないことがあるうか。

E：和歌所の歌人たちとわかって、どうして気持ちの準備をしないことがあるうか。

オ：新たに和歌所の人々が加わったので、どうして交遊しないことがあるうか。

問一ノ二 傍線部2「年を経てみゆきに慣れし花の蔭ふりゆく身をもあはれと思ふ」の解釈として最も適切なものを、次の中から一つ選び、答一ノ二の欄にマークせよ。

ア…何年もみゆきにお供をすることはなかったが、かつて見慣れた花に久しぶりに会って、それをあはれと思わないことがあろうか。  
イ…久しぶりにみゆきのお供をしたのだが、見慣れていた花が、すっかり老いた私のことをあはれと思ってくれたことだよ。  
ウ…幾年もみゆきをお迎えしている花よ、私もそのお供をして立ち慣れた花の蔭であるが、このまま老いていく私のことを、気の毒に思っ  
てくれるか。

エ…数年前にみゆきがあつて以来、願なじみのこの花の蔭に立つのは久しぶりだが、花びらが雪のように降りかかるのを、気の毒に思っ  
ているだろうか。  
オ…何年にもわたって毎年、みゆきの折には宮中の人々をお迎えするのに慣れた花よ、花びらが花蔭に雪のように散るのを、残念に思わ  
ないことがあるうか。

問一ノ三 空欄A・Bに入る最も適切な語を、それぞれ次の中から一つ選び、答一ノ三の欄にマークせよ。

ア…からむ イ…らむ ウ…けれ エ…なむ オ…べし

問一ノ四 傍線部a・b・c・d・eは、それぞれ主語は誰か。最も適切な組み合わせを、次の中から一つ選び、答一ノ四の欄にマークせよ。

ア…	a   宗安	b   家長	c   定家	d   女房	e   歌人たち
イ…	a   女房	b   後鳥羽院	c   家長	d   女房	e   後鳥羽院
ウ…	a   女房	b   後鳥羽院	c   女房	d   後鳥羽院	e   歌人たち
エ…	a   宗安	b   後鳥羽院	c   家長	d   歌人たち	e   家長
オ…	a   女房	b   摂政殿	c   女房	d   後鳥羽院	e   歌人たち

問一ノ五 傍線部3「たつ事やすき」とは、ある古歌の一部であり、ここではその古歌をさしている。その古歌として、文脈上最も適切なものを、次の中から一つ選び、答一ノ五の欄にマークせよ。

ア…今日のみと春を思はぬ時だにもたつ事やすき花のかげかは  
イ…あしがものおりる池の水波のたつ事やすき我が名なりけり  
ウ…吹く風にたつ事やすきあだなみもあさきうらにはよするものかは  
エ…花ならぬならの木かげもなつくればたつ事やすき夕まぐれかは  
オ…ちりはてて花のかげなき木のもとにたつ事やすきなつころもかな

問一ノ六 空欄Cには、ひらがな一字が入る。最も適切な語を、記述解答用紙の答一ノ六の欄に記せ。

問一ノ七 傍線部4「分け参りてこのよしを仲資朝臣もて啓し侍りしかば、出でさせ給ひて、御てづから取らせ給ふ」の解釈として最も適切なものを、次の中から一つ選び、答一ノ七の欄にマークせよ。

ア…隨身が人々をかきわけて参り、これを仲資朝臣が持つてきて後鳥羽院に献上したところ、院が出ていらっしゃって、ご自身でお取りになつた。  
イ…摂政殿が後鳥羽院に参られて、仲資朝臣を介して院にお礼を申し上げたところ、院が出ていらっしゃって、摂政殿のお返事をご自身でお取りになつた。  
ウ…私(家長)は仲資朝臣を連れて、人々をかき分けて摂政殿にこのことをお知らせしたところ、すでに後鳥羽院のところへお出になつていて、ご自身でお取りになつていた。  
エ…摂政殿が、後鳥羽院の御前の人々の間を通つて参り、仲資朝臣が摂政殿にこの歌を献上した時、院が出ていらっしゃって、摂政殿の返歌をご自身でお取りになつた。  
オ…私(家長)は人々をかき分けて参上し、仲資朝臣を介して摂政殿にこのことを申し上げたところ、摂政殿が出ていらっしゃって、ご自身でお取りになつた。

問一ノ八 傍線部Xの「九陌の塵」は、都の喧噪や都市の生活を象徴する語である。都の生活をテーマに詠じた次の南宋・陸游の漢詩を読み、あと  
の問に答えよ。

世味年来薄似紗<sup>(一注一)</sup>  
誰令騎馬客京華<sup>(二注一)</sup>  
小樓一夜聽春雨<sup>(三注一)</sup>  
深巷明朝賣杏花<sup>(三注二)</sup>  
矮紙斜行閑作草<sup>(三注三)</sup>  
晴窗細乳戲分茶<sup>(三注四)</sup>  
素衣莫起風塵歎<sup>(三注五)</sup>  
猶及清明可到家<sup>(三注六)</sup>

(注1) 紗：うすぎぬ。

(注2) 矮紙：小さな紙切れ。

(注3) 作草：草書体の字を書く。

(注4) 細乳：茶をたてる時にできる細かい泡沫のこと。

(注5) 分茶：茶をたてること。

(注6) 清明：晩春の節句。郊外の山野に出かけたり、墓参りをする日。

(I) 傍線部5「誰令騎馬客京華」の返り点の付け方として、最も適切なものを、次の中から一つ選び、答一ノ八(I)の欄にマークせよ。

ア…誰令騎馬客京華  
イ…誰令騎馬客京華  
ウ…誰令騎馬客京華  
エ…誰令騎馬客京華  
オ…誰令騎馬客京華

(II) 傍線部6「小樓一夜聽春雨、深巷明朝賣杏花」の二句の説明として、誤りを含むものを、次の中から一つ選び、答一ノ八(II)の欄にマークせよ。

ア…作者は、まんじりともせず一夜を明かした。  
イ…夜どおし降り続いた雨が、明け方に止んだ。  
ウ…明け方、路地裏に杏の花売りの声が響いた。  
エ…作者は、向かいの小さな楼を見つめている。  
オ…作者は、屋外の音にじつと耳を傾けている。

(III) 傍線部7は、ある古人が「白い衣服が都会の土ほこりで真っ黒になってしまった」と嘆いた故事を踏まえている。この句の書き下し文として、最も適切なものを、次の中から一つ選び、答一ノ八(III)の欄にマークせよ。

ア…素衣 風に起る塵を歎くこと莫かれ  
イ…素衣 起る莫く 風塵に歎く  
ウ…素衣 風塵に起くるを歎くこと莫し  
エ…素衣 莫として 風塵起るを歎く  
オ…素衣 風塵の歎きを起すこと莫かれ

(IV) 作者の心情を説明したものとして、最も適切なものを、次の中から一つ選び、答一ノ八(IV)の欄にマークせよ。

ア…作者は都の生活に嫌気が差しているものの、もうじき故郷に帰れると己を慰めている。  
イ…作者は杏の花売りの声から故郷の田園風景を思い起こし、しばしその余韻にひたっている。  
ウ…作者は初め都の生活に大きな期待を抱いていたが、期待通りには運ばず、失意に暮れている。  
エ…作者は草書を書いたり、茶をたてたりして、都会ならではの文化的な暮らしを楽しんでいる。  
オ…作者は日常のささいな変化や趣味の世界に喜びを見出だし、都会の生活に適応し始めたと感じている。

(V) この詩の詩型を、記述解答用紙の答一ノ八(V)の欄に、漢字四字で楷書によって記せ。

柳田国男は「国語の将来」のなかで、「国語という言葉は、それ自身新しい漢語である。これにあたる語は、古い日本語の中にはないように思う」と述べている。とくに「<sup>A</sup>テンキョ」が示されているわけではないので、この証言をどこまで信頼していいのか迷うところもあるが、柳田が言語に鋭敏な感覚をもっていた人物であるだけに、貴重な証言として受け取ってもいいのではないかと思う。

柳田が「新しい漢語」というときの「新しさ」は、明治時代に新たな意味を負わされた漢語に感じられる独特な感懐であつたらう。つまり、「国語」の「新しさ」は、明治という時代の「新しさ」でもあつたわけである。そして、新しいものがすべてそうであるように、まだ生活の実感に完全には定着していないという意識も柳田にはあつたにちがいない。こんな推測をめぐらしながら、当時の資料をいろいろあたってみると、貴重な証言を探し出すことができた。ただしそれは上田万年<sup>1</sup>の講演「国語と国家」とではない。上田の「国語」は、「新しい漢語」としての役割を十全に發揮しており、「新しさ」を獲得する過程がそこにあらわれているわけではない。たとえていうなら、それは「甲」の「国語」なのである。

わたしが出会った<sup>1</sup>貴重な証言は、明治時代の国学者である関根正直が一八八八（明治二二）年に著した「国語の本体並びに其価値」という論説だつた。この論説が発見できたおかげで、いっしょに視野が開かれたような印象さえ受けたほどだつた。この論説がなぜそれほど重要かという点、「国語」という語に対する感懐がはつきりと述べられているからである。

その冒頭で関根は「近來小中学校に、国語と云へる学科あるは、吾人の知る所なれども、此の国語とは如何なる者なるや、其本体に至りては、世に普く知られざるに似たり」と述べている。「近來小中学校に」云々というのは、一八八六年の小学校令と中学校令による科目の新設を指している。厳密にいうと、「国語」という科目が登場したわけではない。今でいう「国語科」にあたるのは、小学校令では「読書」「作文」「習字」、中学校令では「国語及漢文」であつて、小中学校にも中学校にも「国語」という科目が定められたわけではなかつた。ただし、師範学校令によって、尋常師範学校では「国語」という教科が「漢文」とは別に定められていた。ちなみに、小学校で「国語」という教科がはじめて登場するのは、一九〇〇年の小学校令改正のときである。

ともかく、冒頭に「最近小中学校に「国語」という学科があるのはみなさん御存知でしょうが」ということが出てくるのは、まだ「国語」という語に目新しさがあつたからである。しかし、わたしが注目したのはこのつぎの部分である。つづけて関根は、「国語とは、ラングエージと云ふ英語の譯字なるべく聞ゆ」といい、そうであれば「国文」のほうがわかりやすいかもしれない、なぜなら「語」とのみにへば単語の事と聞ゆればなり」と述べているのである。たしかに、江戸時代後期の洋学者の著作には、しばしばオランダ語の *taal* や英語の *language* の翻訳語として「国語」が登場することは事実である。してみると、この時点（明治二二）では、「国語」という語に翻訳語としての感懐が残っていたわけである。

しかし、翻訳語として用いられたという事実と翻訳語として意識されていたこと、つまり言語使用と言語意識は別のレベルに属する。<sup>2</sup> 逆説的なことに、「国語」の新しさとは、翻訳語としての新しさではない。むしろ逆に、「国語」が *language* の翻訳語であることが忘れられていくことに、「国語」の新しさが出現する地盤があつた。関根の論説の一〇年後には、「国語」が「ラングエージと云ふ英語の譯字」であることは、まったく意識されなくなるだろう。このような断層を乗り越えることによって、近代日本における「国語」の理念は確立していくのである。

このような断層はほかにも存在した。関根が述べたように、「国語」というのは単語のことなのか、それとも言語全体のことなのか、というあいまいな点があつたのである。たしかに、日本語の「一語」という語構成の熟語は、意味のうえで一貫しないところがある。「英語」はイギリスの言語であるが、「漢語」は漢字の熟語のことである（もちろん、中国語で「漢語」は「中国語」のことを指す）。「外国語」は *foreign language* であるが、「外来語」は *loan word* である、とつづつように。

亀井孝は、先駆的な論文「<sup>く</sup>く」とはいかなることはなりや」のなかで、江戸時代の洋学者川本幸民の文章のなかに「国語」の用例を見いだしているが、それは文章のうち仮名で書かれた部分と字訓による漢字で書かれた部分を指しており、「<sup>く</sup>く」のレヴェルで日本語をとらえてみようとするそのかまえ」が川本にあつたと論じている。しかし、「国語」を言語全体ではなく語のレベルでとらえるということは、川本の独自性というよりは、「一語」という日本語の語構成に必然的につきまとう両義性から来るところがある。たとえば、前島密の「漢字御廃止之儀」をよく読んでみると、「国語」という語にはふたつの用法があるのがわかる。ひとつは語句の水俣で「漢語」に対立する日本語要素を指す用法であり、もうひとつは「英国等の羅何語等を其仮入れて其国語となし」とあるように、普通名詞として言語全体を指す用法である。もちろん、後者の場合、普通名詞であるかぎり、日本語だけに限定されない。

明治時代には「国語国文」という言い方がよく用いられたが、この場合の「国語」が語を指すのか言語全体を指すのかは文脈によって異なる。すこし時代は下るが、一九〇〇年に帝國教育会が文字の改良や言文一致の実行をもとめて、国会に嘆願書を提出したことがある。その嘆願書は「国語国文の改良に関する嘆願書」と題されていた。「国字国語国文」という順序でみるかぎり、ここでいう「国語」は乙のように思われる。

しかし、語のレベルでの「国語」がどういうものかを見極めたいなら、なによりも「国語仮名遣」と「字音仮名遣」という用語の使い分けに注目すればよい。「字音仮名遣」は音読みの漢字語に対する仮名づかいであり、元の中国語の発音を仮名文字でペンベツしようとしたものであるのに対し、「国語仮名遣」は和語に適用される仮名づかいである。たとえば、明治四一年に臨時仮名遣調査委員会が設立されたとき、委員会の目的は「国語及字音の仮名遣に関する事項を調査することにあるとされた。ここでの「国語」とは、あくまで語のレベルでとらえられているのであつて、場合によっては「和語」とも言い換えられる語要素を指している。

それでは、字音語つまり音読みの漢字語は「国語」のなかに包摂されないのだろうか。「国語」とは日本古来の土着語のことなのだろうか。関根正直は、先ほどとりあげた「国語の本体並びに其価値」でまさにその点についてふれて、「字音の語を国語に非ずとするは非なる事」を論じている。関根によれば、漢語は国語には属さないという学者もいるが、数百年来の伝統によって漢語は国語に同化しているのだから、国語に同化された漢語を無理に除去するにはおよばない。つまり、字音で読まれる漢語には「国語仮名遣」が適用されないが、それでも漢語は「国語」の一部なのである。

つまり、字音語は語のレベルでは「国語」ではないが、全体としての「国語」に所属しているということになる。

もちろん、「国語」の概念のなかで、土着性の要素が完全に消え去るわけではない。「国語」の同一性をどのようにとらえるかによって、「外」の要素は同化されることもあれば排除されることもある。このどちらの傾向をとるかに応じて、「国語」は異なる相貌を示すのである。

「国語」をめぐるとなる断層は、それが普通名詞なのか固有名詞なのかにかかわる。すでに述べたように、「国語」ということはひとつの用法は、それが language の翻訳語であることから来る。その用い方にしたがえば、国語は世界のあらゆる「一語」にあてはまる普通名詞となり、日本語だけを指すわけではなくなる。この種の用例は、数かぎりなくある。たとえば、大槻文彦の『広日本文典別記』(一八九七)では、「国語」が英語の language に対応する普通名詞であることが明言されている。したがって、固有の国家をもたない「亜米利加土人の語」でさえも「国語」としてあつかわれている。

しかし、そのように「国語」をあらゆる「一語」に適用するのは正反対のベクトルが存在する。それは「国語」の固有名詞的用法、つまり「国語」といえば「日本語」を指すという用法である。この固有名詞的意味を獲得するかどうか、「国語」の概念の展開にとって重要な意味をもっていたことはいままでもない。学校で「国語」が教えられるといえ、誰も日本語以外の言語のことを思い浮かべないだろうし、「国語辞書」はすなわち日本語の辞書を指すことになる。とはいえ、普通名詞的用法と固有名詞的用法がただちに峻別できるとはかぎらない。たとえば、つぎのような大槻文彦の言はどうか。「一國の国語は、外に対しては、一民族たることを証し、内にしては、同胞一体なる公義感覺を團結せしむるものにて、即ち、国語の統一は、独立たる基礎にして、独立たる標識なり」。

この大槻の文の「国語」を普通名詞として、つまりは一般的にあらゆる「一語」にあてはまるものとして読むことは決して不可能ではない。けれども、大槻はこの文章の直前で、日本では「国体も、国語も、共に他の侵犯を受けしことなく」と述べ、「国語」と「国体」の結びつきを称えている。そういうコンテキストにおかれれば、上の文章はただちに日本の「国語」のことを語っているという意味を生じさせる。このようにして、「国語」ということばの意味は、文脈に応じて普通名詞的用法と固有名詞的用法のあいだを行ったり来たりする伸縮性を獲得するのである。

(イ・ヨンスク「ことば」と「幻影」より)

(注一) 上田万年。国語学者。言語学者。一八九四(明治二七)年に海外留学を終えて帝国大学教授となり、同年の講演「国語と国家」では、西欧言語学を背景に国語と国家との一体化を説いた。

問二ノ一 傍線部 A・B にあてはまる漢字を、記述解答用紙の答二ノ一の欄に楷書で記せ。

問二ノ二 空欄甲に入る表現として最も適切なものを、次の中から一つ選び、答二ノ二の欄にマークせよ。

A…外来語    I…手術後    U…過渡期    E…成長期    O…入国後

問二ノ三 傍線部 1「貴重な証言」とあるが、なぜ「貴重」なのか。その理由の説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、答二ノ三の欄にマークせよ。

A…「国語」ということばについて、明治時代の数少ない国語学者によって記された信頼のおける論説だから。

I…「国語」ということばが学校に登場する前の、「国語」にあたる学料の内容を具体的に示してくれる論説だから。

U…「国語」ということばがこの時期においている価値について、明らかに述べている論説だから。

E…「国語」ということばが、まだなじみのない言葉として意識されつつ用いられている論説だから。

O…「国語」ということばの、明治時代まで用いられていた伝統的な用法をうかがうことができる論説だから。

問二ノ四 傍線部 2「逆説的なこと」とあるが、何が、なぜ「逆説的」なのか。その理由の説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、答二ノ四の欄にマークせよ。

A…「国語」が新たな翻訳語として用いられていたことと、翻訳語として意識されていたことが、必ずしも一致していなかったため。

I…「国語」ということばが翻訳語として使われていた「新しさ」が、近代日本における「国語」の理念と相反するものであったため。

U…「国語」ということばが獲得した、近代日本の「国語」としての「新しさ」のうちにも、江戸後期の古い「国語」の用法が残っていたため。

E…「国語」ということばの用法がしだいに定着し、安定していくなかで、その翻訳語としての新しさが徐々に失われていってしまったため。

O…「国語」が、翻訳語としての「新しさ」を失っていくことが、一方で「国語」の「新しさ」を作り出すこととなっていったため。

問二ノ五 空欄乙に入る表現として最も適切なものを、次の中から一つ選び、答二ノ五の欄にマークせよ。

- ア…語のレベルではなく、やはり言語全体のレベルで用いられている
- イ…言語全体ではなく、やはり語のレベルで用いられている
- ウ…国文全体ではなく、やはり国語のレベルで用いられている
- エ…語のレベルではなく、やはり国語全体のレベルで用いられている
- オ…国語のレベルではなく、やはり国文全体のレベルで用いられている

問二ノ六 傍線部3「外」の要素は同化されることもあれば排除されることもある」とは具体的にどういうことか。その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、答二ノ六の欄にマークせよ。

- ア…「学校」という語は、「まなぶ」という語と同じように「国語」とされることもあれば、中国から来た語であって「国語」ではないとされることもある。
- イ…「学校」という語は、古い時代には中国語として意識されていたが、近代においては翻訳語とは異なる、もともとあった「国語」として意識される。
- ウ…「学校」という語は中国語として入ってきたものであり、「まなぶ」という語は土着の語なので、それぞれの用法が互いに相容れないものとして排他的に用いられる。
- エ…「学校」という語は、日本古来の土着語として「国語」とされることもあれば、外来語であって「国語」ではないとされることもある。
- オ…「学校」という語は、「まなぶ」という語を含んでいるため、土着の語と同一の「国語」とされることもあれば、中国から来た外来語とされることもある。

問二ノ七 傍線部4「この固有名詞の意味を獲得するかどうか」、「国語」の概念の展開にとって重要な意味をもっていた」とあるが、それはなぜか。その理由の説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、答二ノ七の欄にマークせよ。

- ア…「国語」ということばが、近代の国家と文化に対応した、機能性を発達させていくことができるようになるため。
- イ…「国語」ということばが、日本という国家との間に、現在まで続く自明のつながりをもつようになるため。
- ウ…「国語」ということばが、日本語ばかりではなく、外来語をも吸収し、同化する柔軟性をもつようになるため。
- エ…「国語」ということばが、古くから持っていた意味を回復し、明確な概念として用いられるようになるため。
- オ…「国語」ということばが、日本語を指したり、外国語も含めて一般に言語を指したりする両義性を獲得できるため。

問二ノ八 本文全体の内容と合致するものを、次の中から二つ選び、答二ノ八の欄にマークせよ。

- ア…「国語」ということばは、明治期になって登場する翻訳語であり、小学校では「読書」「作文」「習字」にあたる学科として定着していく。
- イ…「国語」ということばの過去の用例には、日本の固有の言語をあらわすのみならず、外国語を含めた言語全般を指している場合がある。
- ウ…「国語」ということばが、日本の「国語」を表すのか、外国語をふくめた言語全体を指すのかは、文脈によって判断することができる。
- エ…明治時代における「国語」ということばの新しさは、海外文化の流入する明治という時代の新しさであり、かつ外来語としての新鮮さであった。

オ…中国から日本に入ってきた漢語は、長い時間をかけて日本語に同化してきたが、本来の「国語」の意味からは除外してとらえる必要がある。

カ…明治期においては、「国語」ということばで日本語全体を表したが、またその中の和語のような特定の語をあらわす場合もあった。

「養育」という概念がある。あまり威勢のよくない概念の一つであろう。現代の家族において、養育つまり食事の世話と子育ては、機能縮小した家族が「再生産」の場としてもちうる最後の機能とみなされている。それは、社会からの撤退の結果残された私的で消極的な活動と考えられているときには、親密イデオロギーを培養する閉鎖的な営みとして、あるいは性差別を日常的に再生産する活動として、否定的な意味をすら与えられている。このような消極性ないし否定性が、女性がおかれた「位置」にかかわるとすれば、この基礎的活動から私たちにとっての「学ぶ経験」をとりだすことはできないだろうか。

「からだの声に耳をすますと」においてデメトラコポロス<sup>〔註〕</sup>が提出する「家母長としての老女」のあり方は、この点においてきわめて示唆的である。「保護や養育の技術と習練が家母長の知恵の根底である」として、彼女は次のように指摘する。

男性研究者たちが見落としがちで、しかも重要なことがひとつある。ほかの人にくらべて管理能力が高くて支配する力をもつ老女は、他人に対する決定をくだす場合、若いころつちかつた世話をする能力に基礎をおいている。……老女は他にすぐれて大きい自分の決定力を、同情と他人への心くばりにもとづいて行使する。こうして老女の指導権は、男の指導権とは質のちがうものとなる。とは言っても、これは女が年老いるにつれて家族とのつながりを乗り越え、個の自立に向かうということではない。むしろ、若いころの伝統的な女性の役割が変容して、老いた女たちが社会における力強い触媒の役割を担うようにしむけているのだ。老いた女たちは家族や血縁とのつながりにとらわれることが少なくなり、より大きな集団とのつながりをもつようになる。

「保護や養育」がどういう力を生みだしうるかに注意が向けられている。新しい名づけ<sup>〔註〕</sup>の試みである。ここには二つのことが言われている。一つは、男とは質的に異なる「老女」の決断力や指導権といえるものが見出せるのであって、それは「同情と他人への心くばり」や「世話をする能力」にもとづいている。他人に対する配慮や世話は、けつして一方的に消費されるのではない。その経験は蓄積されて、他者に対する独自の能力を醸成する。その発酵を可能にし、決定をくだす力として結晶させるのは、老女という位置にほかならない。もう一つは、したがって老女の能力は、「個の自立」に向かうことによつてではなく、むしろ伝統的といつてよ、「役割」に基礎をおいている。その役割が「変容」して、家族にとらわれない大きな集団とのつながりをもたらす。つまり社会における触媒の役割を担うように「しむけている」のである。

この役割の変容という考え方と、その基礎におかれた「世話をする能力」の評価にもとづく「家母長の知恵」の概念は、「新しい名づけ」に値するだろう。「役割」は固定した関係を再生産する媒体ではなく、反対に、社会への開放系としてとらえなおされている。それは、多形的で開放的な「つながり」をもたらす媒体たりうるのである。そして、役割にこのような変容を促し現実化する基盤が、時間をかけて培われた世話をする能力であり、他人に対する配慮であった。「養育」という概念は、ここで意味の転換ないし拡張をなしてあげるといえよう。消極性あるいは否定性のもとにおかれるこの概念について、ほぼ全面的な意味の組みかえと、ベクトルの逆転がなされている。それによつて「養育の技術と習練」から独自の知恵と能力とがとりだされている。そして、社会性をもつとも縮小された営みが、逆に社会的関係を形成する触媒、あるいはそれを準備する活動へと転換されているのである。

養育についてのこの新しい名づけは、さらに分節化されるかもしれない。養育はそこで、家族や血縁との結びつきを越えるものへと向けられていた。それをおしすすめて、「養育」を現代の社会関係そのものを見なおし、再編するための概念として考えることができるからである。そのためには、「老女の力」を腑分けしなければならぬ。すなわち、彼女たちが「管理能力が高くて支配する力をもつ」ことは、若い頃から培ってきた「世話をする能力」にもとづくとされてきた。ここでは管理と世話という能力が、老女の決定をくだす力のなかに統合されたものとして語られていた。これに対して、「養育」を、私たちを包摂する社会機構のあり方を照らした一つの光源のような概念として導入するとき、それは分節されねばならない。たとえば、次のような考え方があつた。

命令の連鎖は、養育についてのひらかれた言説によつて掃さぶることが出来る。より正確には、近代の非軍事的な命令連鎖は、この方法で覚醒させることができる。なぜなら、近代社会の最も回避されてきた主題の一つは、管理されることと世話されることとの関係だからである。

(リチャード・セネット<sup>〔註〕</sup>「権威」)

養育が、恩恵を施すことや抑圧することと一体であるとき、それを受けることは、自分を支配する力を他人に与えることとなる。ここでは、他者の助けを必要とすることは、そのまま力関係すなわち命令連鎖のなかに身を委ねることであり、しかも弱者として身をおくことである。つまり「管理されること」である。他者を必要とするという基本的な「人間的欲求」は、この社会機構のなかでは一方向的な管理の項目として位置づけられてしまふことになる。そうであるとするれば、そこから(世話する→されるという)相互関係を救い出すためには、養育を分節することによつて「世話されること」の新たな意味をとりださなければならぬだろう。

養育を争点とすること、すなわち管理と世話との関係を考えることを回避させてきた事態の基底には、おそらく産業社会が刻印した心性である。「自分が誰か他の人よりも弱く、従つてその人に依存するのは、恥である」という感情(セネット)がある。弱さの感覚と依存の欲求が、このような感情構造と固く結びつくとするれば、その状態を受けいれることは屈辱的なこととなる。それはひたすら、そのような感覚の抑圧と欲求の拒絶とをもたらしださう。

しかし事態は、それにとどまらない。「他の人」への依存を恥と思う感情が、非人格的に制度化された「養育」への依存、つまり管理されることを招き入れてしまふのである。「他の人」を追放した領域に専門制度が全面的に侵入し、逆にその制度によつて新たな依存の心性が形づくられてしまふのである。この逆説的な事態のなかで、弱さの感覚は、個人的な抑圧や処理(自助)に委ねられるだけでなく、組織による吸収(保険)や制度



的な置換(福祉)によって変形加工されてしまう。こうして、養育をめぐる争点は回避されるだろう。

「弱さ」の率直な認知、これが「問い」のための前提となるべきではないか。それは功利主義的な「効用」計算によっては、測ることも埋め合わせることもできない弱さである。そして、「福祉Ⅱ管理」国家以前の「自発的な依存」とでもいうべきものを恢復しなければならぬのではないか。自分をとりまく環境から言葉を受けとる幼児のような「自発性」に裏打ちされた「依存」である。そのためには、恥の感情とともに追放した「他人」を具体的にとりもどす必要があるだろう。世話をしあう「他の人」である。そうであるならば、この事態について率直な認知の可能な場として、改めて家族が見なおされねばならない。成員個々の弱さが露わになり、それを通じて相互の依存が不断に営まれるはずの場所だからである。自分と同じように年老いるし衰弱もする存在と日常的に相互交渉するはずの場所だからである。あるいは、そのような「養育」の場として「覚醒」されなければならない、と言うべきだろうか。

相互性の習練の場としての家族、ということが言えるだろうか。求められているのが、弱さや依存を含まざるをえない生活に対するまっとうな認識であり、それを破壊してしまう管理機構に対抗しうる関係であるとすれば、「世話」や「養育」をめぐる名づけなおしは、あるいはその新たな「概念」を生きたることは、小さな場所における社会の再構築のための試みともいえるだろう。そう言えるかぎり、家族の感情、階級の感情、そしておそらく他のところでは人種の感情は、多様性にたいする同一の不寛容さの表明として、画一性への同一の配慮の表明として、出現する(フィリップ・アリエス<sup>4</sup>)とされるところから出発した近代家族は、大きく反転しなければならぬ。多様性にたいする寛容な態度、画一性にたいする対抗感覚の「表明」を要請されているのである。

このような逆説的な要請を生みだすほどに、私たちを貫く画一化の範囲と強度が増大していることは明らかである。だからといって、家族は社会的想像力が追いつめられた場所にすぎない、とは言えないだろう。それは、あるいは「相互依存を認めることが恥ではなく解放であるような社会」のための助走路となるかもしれないのである。

(市村弘正「小さなものの諸形態」より)

(注1) ステファニー・デメトラコポウロス。アメリカの文学者。ルネサンスの文学や芸術を専攻するが、女性学の専門家でもある。「からだの声に耳をすます」とよみがえる女の知恵」はその主著。なお、このあとに出てくる「家母長」は、「家父長」に対置される考え方である。

(注2) 筆者は、「名づけ」について、別の箇所、「名づける」とは、物事を創造または生成させる行為であり、そのようにして誕生した物事の認識そのものと述べている。

(注3) リチャード・セネット。アメリカの社会学者。

(注4) フィリップ・アリエス。フランスの歴史学者。

問三ノ一 傍線部1「他人に対する配慮や世話は、けつして一方的に消費されるのではない」とあるが、その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、答三ノ一の欄にマークせよ。

ア…他人に配慮したり世話をしたりすれば、必ずその相手からも配慮や世話を期待できるということ。

イ…他人に配慮したり世話をしたりすれば、そのように行動する者に、配慮したり世話をしたりする能力が備わっていくということ。

ウ…他人に配慮したり世話をしたりすれば、そのことが世間で認められ、自分の社会的価値が上がるということ。

エ…他人に配慮したり世話をしたりすれば、そうした行動における決断力や指導力が評価され、それに相当する地位につけるとのこと。

オ…他人に配慮したり世話をしたりすれば、単に自立した個人としてだけでなく、自己の役割を集団のなかで自覚した人間として尊敬されるとのこと。

問三ノ二 傍線部2「養育」という概念は、ここで意味の転換ないし拡張をなしとげているといえよう」とあるが、その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、答三ノ二の欄にマークせよ。

ア…「養育」という概念は、単に食事の世話や子育てだけでなく、ともすれば崩壊しかねない家族を蘇らせる可能性に関係するということ。

イ…「養育」という概念は、世話や配慮に基づく行為そのものを指す一方で、それをおこなう人間が家庭や社会で果たす伝統的な役割の再評価につながるということ。

ウ…「養育」という概念は、家族のなかでの役割に基づく世話や配慮を指しながらも、閉じられた狭い関係にとどまらずに、開かれた関係を社会のなかにもたらすということ。

エ…「養育」という概念は、歴史的には消極的な意味合いしか与えられてこなかったが、家母長的な家族のあり方が見直されるに伴い、積極的に評価されるようになってきているということ。

オ…「養育」という概念は、各自の役割が固定した家族関係からの脱却を可能にし、家族のあいだに自立した個人どうしの新しいつながりを築くということ。

問三ノ三 傍線部3「養育を分節することによって「世話されること」の新たな意味をとりださなければならぬだろう」とあるが、その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、答三ノ三の欄にマークせよ。

ア…養育は、人間誰しも自分を世話してくれる他者を必要とするという事実に立脚しているが、それを養育の社会的位置づけとは切り離して考えなければいけないということ。

イ…養育は、「世話をする」される」という相互関係によって成り立っているが、その相互関係をいったん切り離し、それぞれ独自のものとして考えなければいけないということ。

ウ…養育は、世話をしてくれる相手への依存の欲求だけでなく、それを恥と思う感情の葛藤もたらしがちであるから、その欲求や葛藤のそれぞれと個別に対処する方法を考えねばならないということ。

エ…養育は、管理社会のなかでの世話や配慮とみなされがちだが、そこから、一方的なかたちではない管理として養育を新たに考えなければいけないということ。

オ…養育は、管理と一体化しがちであるが、そうした力関係から引き離れたかたちで、人を世話したり、人に世話されたりするというあり方を考えていかなければいけないということ。

問三ノ四 傍線部4「この逆説的な事態」とあるが、その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、答三ノ四の欄にマークせよ。

ア…「他の人」に依存することを恥と思うがゆえに、制度化された養育に頼り、その結果、さらに依存度の高い管理の制度に組み込まれてしまうということ。

イ…本来は個人の問題である弱さの感覚が、組織や制度の問題として扱われて管理されてしまうということ。

ウ…養育の問題に詳しい人たちを選別して専門制度を構築したはずが、かえって実情にはそぐわない制度ができあがってしまったということ。

エ…「他の人」に依存したいという欲求が恥の感情を誘発し、その感情がさらに弱さの感覚をもたらし、依存の欲求を増幅してしまうということ。

オ…非人格的な養育制度に依存するのを恥と思うあまり、かえって閉鎖的な家庭のなかの抑圧された依存関係にとらわれてしまうということ。

問三ノ五 傍線部5「恥の感情とともに追放した「他の人」を具体的にとりもどす」とあるが、その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、答三ノ五の欄にマークせよ。

ア…自分が「他の人」にただ依存するだけの弱い存在だと思つて恥の感情が湧いてきてしまうので、自分の弱さを認めつつも、自分のほうからも世話をできる幼児のような相手を見つけ、その相手を自分にとっての新たな「他の人」にするということ。

イ…自分の弱さを認めたくなくて、自然ななりゆきとして「他の人」に依存するのを恥と思わず、世話をしてくれる人を単なる一方的な依存の対象ではない、相互依存の相手とみなすということ。

ウ…自分の弱さを誰かに知られてしまうと、その人を排除しがちだが、それを続けていては人間関係が築けなくなるので、自分のことを知らない「他の人」との新たな関係を築くということ。

エ…たとえ自分の弱さを見せるのを恥だと感じたとしても、自分だけでは生きていけない以上、弱さを素直に認め、自分を世話してくれる「他の人」を一度受け入れるということ。

オ…自分の弱さを家族などではなく、福祉施設などのまったくの他人に知られるのは恥である以上、もう一度家族と向き合い、より身近な「他の人」としてのつきあいを取り戻すということ。

問三ノ六 傍線部6「小さな場所における社会の再構築のための試み」とあるが、その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、答三ノ六の欄にマークせよ。

ア：実際の社会という大きな場所においては、もはや人間的な関係を築くことは不可能であるので、家族という小さな場所での養育をとおして理想的な社会のひな型を作るということ。

イ：自分たち以外の「他の人」を容易には受け入れない不寛容な小さな場所としての家族をいったん解体し、そこに互いへの配慮に満ちた福祉社会をあらたに作り直そうとすること。

ウ：弱さや依存が含まれた人間関係が常となる家族という小さな場所を見直し、そうした弱さや依存から脱却した養育のあり方を模索して、ひとりひとりが依存を必要としない強い存在となれる社会をめざすということ。

エ：家族という小さな場所において、管理に陥らない相互依存の関係を築き、それを出発点として、管理機構の場とは別のものとしての社会のあり方に向かっていくということ。

オ：閉じた関係になりやすい家族という小さな場において、養育を福祉機関との連携でおこなうことでそれを開かれた場へと変貌させ、そこに社会制度につながる筋道を作つてやるということ。

問三ノ七

傍線部7「だからといって、家族は社会的想像力が追いつめられた場所にすぎない、とは言えないだろう」と述べているように、筆者は家族の問題を社会の問題と関係づける可能性を求めている。そうした筆者の考えに従えば、どのような家族がめざされるべきか。本文中の一節を単に抜き書きするのではなく、あくまで自分の文章として構成し、一〇〇字以上一三〇字以内で記述せよ。(解答は記述解答用紙の答三ノ七の欄に楷書で記述すること。その際、句読点、括弧記号などもそれぞれ一字分に数え、必ず「マス用いること」)

〔以下余白〕